

結成20周年  
新たな大躍進  
に向け出発!

# 月刊 動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合

〒260-0017 千葉市中央区要町2番8号 (動力車会館)  
電話 (鉄電) 千葉 2935・2939 番  
(公) 043 (222) 7207 番  
99. 9. 24 No. 5022

## 東労組の正 体を暴く①

# 79年津田沼襲撃事件

## 危機にたつJR総連!

七九年、四・一七津田沼襲撃と、八ヶ月間の革マルとの激闘の勝利

動労千葉が、旧動労(現JR総連)のあまりにもひどい変質に抗したものと分かった直後の一九七九年四月一七日、信じられないような事件が起きた。午前十一時すぎ、旧動労革マルは、学生を含めた一五〇名で青竹、パールで武装し、当局公認のもとに津田沼電車区を襲撃、当時支部長だった片岡さんら八名の役員は重傷を負いながらも三時間にもわたり防戦。点呼も不可能となり八〇本の列車が運休。しかも破壊集団は機動隊に守られ引きあげていったのである。だが津田沼支部の仲間、前日の武装襲撃から職場、支部を守りぬいた力で翌日一八日、津田沼支部の結成大会を堂々と勝ちとっていった。

それ以降約八ヶ月間にわたり全支部で革マルの襲撃を打ち破り、多くの血を流しながらも次々と、支部、青年部、分科会を結成していった。

革マルは、のべ三万人と約三億円の金を投入し、執拗に暴力、恫喝をほしいるままに、襲いかかった。だが動労千葉は決して負けなかった。否、屈するどころかこの闘いの中から今日の動労千葉魂と団結ががちとられていったのである。

この勝利は、革マルの反労働者集団としての正体を全面的に暴き、彼らの脆弱性を満天下にさらし、反労働者集団解体、一掃の闘いを闘う労働者人民の共同の課題へと押し上げていったのである。

今こそ、結成から二〇年の闘いと、その中から闘い取った教訓をしつかりとうち固め、JR総連解体―組織拡大にうつて出よう。

### 説得行動という名の つるし上げ

今JR東労組の内部では、「組織内からの組織破壊者」摘発運動と称して、普通の労働組合では想像もできない内部粛清のつるしあげが革マル分子によってエスカレートしている。

(日刊五〇一九号でその一端を紹介)

革マルの数々の悪逆非道を知る者にとっては、いま起こっている事態が示していることは、JR総連・革マルの危機が崩壊寸前のところまでゆき着いてしまっている。「後がない」ゆえの凶暴化であることを誰もが直感している。ときは今、この絶好のチャンスを見逃さず一大攻勢に打って出よう。

### 革マルは ファシスト集団そのもの

そもそも、革マルは旧動労時代から一貫して、労働者(人間)は恫喝や暴力で脅かせば服従し、支配できるという人間感にこり固まっている。

また、他の労働者を犠牲に自分だけが新会社(JR)に残るために労働組合の大義も原則も

投げすて、敵に売り渡してきた。この反動の本質があらわにされ、全労働者の怒りでたたき出されるのを恐れ、それをかわそうとして、「ウソも百ぺん言えば真実になる」(ヒットラーの言葉)とばかりに、インチキなスローガンをかかげ、運動への介入、かく乱に血道をあげてきた。

ごく最近の例では、革マルがJR総連組合員を引きまわし、新ガイドライン法や、組対法にあたかも反対しているかのようなポーズをとり、必死で介入、かく乱を画策するが、他の全ての団体や参加者から「無視」、弾劾され、一番大事な国会の山場ではだれひとり登場することも出来なかったのである。

かつて、ナチス・ヒットラーが、「社会主義」と「労働者」という看板を掲げて人民をあざむきながら、実際には闘う労働者に襲いかかり、徹底的に組織と闘いを破壊していった。革マルが今やっていることは、まったくこのナチスと同じことである。自分たちの組合員ですら信頼することも出来ない、ただただ「支配」あるのみという点でも全く同一である。

革マルが恫喝や暴力に訴えようとすればするほど、ますます孤立し「包囲」され、一層自らをドタン場へと追いこんでいくのである。動労千葉二〇年の闘いと今日の地平はそのことを見事に立証している。



(上) 本部革マルによる4・17津田沼襲撃、破壊された正面玄関  
(右下) パールで壊されたドア